

アダム・スミスの商業社会における消費の意義

山口 正 春

- 一 問題提起
- 二 衡示的消費の浸透
- 三 富と上流人士への称賛
- 四 富と徳性の問題
- 五 むすびにかえて

一 問題提起

ピューリタン革命が開始された一六四〇年頃の段階では、イギリスの輸入の大部分を手中に収めていたロンドン港

アダム・スミスの商業社会における消費の意義（山口）

七三（二〇三）

においても、輸入品のほとんどは、ヨーロッパ大陸の内部から輸入されていた。すでに設立四〇年ほどの歴史をもっていた東インド会社は、いまだ組織が脆弱で、オランダとの競争では太刀打ちできず、肝心の香料貿易にも手が出せなかったし、その上カリブ海の砂糖生産も本格化してはいなかったからである。

ところが、一六六〇年の王政復古後、インドを中心とするアジア地域と西インド諸島を軸にした新世界からの輸入は爆発的に増加し、ロンドン港の輸入の四分の一を占めるにいたる。この傾向はその後一世紀以上も続き、アメリカ独立戦争直前の一七七〇年代はじめには、旧来のヨーロッパ市場からの輸入は、統計のとり方によっては、全体の半額以下にさえなってしまう^①。貿易史家デイビスによつて、イギリス経済史上、この現象に「商業革命」の名が与えられているのも決して不思議ではない。

「一七六〇年以降の一世紀の間における目覚ましい経済上の諸変革が、ほとんど産業革命との関連で生じたように、一六六〇年以降の一世紀あまりに起つた経済変化は、貿易と結びついていた。……それゆえ、王政復古からアメリカ独立戦争にいたるまでの期間に商業革命の名前を与えらるゝとしても不当ではあるまい^②。」

つまり一六六〇年頃から一七六〇年ほどの期間は、イギリスにとつて「商業革命」の時代であり、世界的な中継貿易の軸がオランダからイギリスに移つた時期なのである。そして「商業革命」を可能にした象徴的な出来事が、いうまでもなく一六一五年の航海条例の制定であつた。航海条例は、当時、ヨーロッパの貿易を独占していたオランダの商業活動に対抗するため、イギリスが採つた典型的な重商主義政策であつた。

商業革命によつて、輸入品目も新大陸・西インド諸島やアジア・アフリカ地域からの煙草、紅茶、砂糖、綿製品などの再輸出品目をふくむ目新しい商品にさま変わりをし、それと同時に、イギリス社会に消費生活の変革をもたらした。新しい消費習慣を中心とする生活様式の変革すなわち生活革命とよばれる現象を生みだした。商業革命を背景とする生活革命の時代は、「都市ルネサンス」の時代でもあり、ロンドンをはじめとし地方都市においても、「都市的な生活文化」といわれるものが誕生する⁽³⁾。こうして商業革命を背景としながらイギリスは、ヨーロッパ国家というよりは、植民地を基盤とする重商主義的世界帝国となつていったのである。

この時期は、海外植民地との交易に従事し、巨額の富を手にした貿易商人を中心に新興の富裕階級が台頭するとともに、中産階級（ブルジョアジー）が強い力をつけたころでもあった。新興の富裕階級は、ジェントルマンと称して貴族階級の仲間入りをしようとする。こうして「疑似ジェントルマン」⁽⁴⁾とよばれる者がぞくぞくと誕生したのである。彼らは奢侈品、贅沢品を身につけ、大陸のファッションを身にまとい、「貴族風」であることを誇示した。

新しい消費習慣による奢侈現象の真只中にあつて、人々の生活態度には当然のことながら、「虚栄」と「流行」という風潮が生じてくる⁽⁵⁾。当時のイギリス社会は新奇な商品、目新しい情報などが次々と生み出されており、人々はその後を夢中で追いかけているあり様であつた⁽⁶⁾⁽⁷⁾。イギリスの社会構造は、とりわけ密接な結びつきをその特徴とし、その結果、各階層は、すぐ上位の階層の行動様式や生活態度を模倣し、機会があればその仲間入りをしようとするチャンスを待ち受けていた⁽⁸⁾。

こうした現象は、上流・富裕の人士のみではない。中産階級、スミスのいう、いわゆる「中流並びに下層の者」⁽⁹⁾ 中下層の者も虚栄のため、新奇な財貨を保有したり、奢侈品を見せびらかしたりと、生活態度は外面的な華やかさへ

と向いつつあった。彼らも分不相な消費を通じて社会的昇進をはかり、自分より上位の社会的地位にある人々の生活態度を模倣しようと努め、流行を追うのである。この時期、イギリス社会に出現していたのは、いみじくもマッケンドリックが「消費革命」と呼んでいるものにほかならない。すなわち需要の増加であり、消費の民主化であり、消費社会の到来であった。⁹⁾

これは前に見たように、商業革命による非ヨーロッパ世界からの新奇な商品の輸入によって生じたものであるが、他方、イギリス国内に目を向けると、重商主義の保護政策により毛織物、絹織物、綿織物をはじめとする繊維産業および金属工業、化学工業、醸造工業のほか各種のマニユファクチャの著しい進展が見られた。新しい製品が開発され、国内の各種の奢侈産業が発展した。こうした国内産業・奢侈産業の進展とともに、見落してはならないのは、ロンドンを中心とした「流通機構の制度的変化、具体的には小売業の組織的变化」¹⁰⁾である。このような流通機構の制度的変化による流通の促進と国内産奢侈品の消費は、外国産奢侈品の消費と相俟って衣食住にわたり人々の生活享樂品の消費を増大し、生活水準を向上せしめていたのである。

当時の消費社会の到来を目の当りにしたスミスにとって、新しい消費習慣による消費現象の問題を避けて通ることはできなかつた。さらに、当時の商工業の発展が人々におよぼす影響についても無関心ではいられなかつた。スミスは消費現象を、いかに捉えていたか。商工業の発展は、彼にとって何を意味したのか。小論では、以下、紙幅の許すかぎり、こうした点を中心に検討したいと思う。

(1) 川北稔『工業化の歴史的前提』岩波書店、一九八五年、一三一―九頁参照。喜安郎・川北稔『大都会の誕生』有斐閣、昭

和六一年、一一頁。

- (2) Ralph Davis, *A Commercial Revolution: English Overseas Trade in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, 1957, p.3.
- (3) 角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国―イギリス都市生活史―』平凡社、一九八二年、一一―三頁。
- (4) 川北稔、前掲書、Ⅲ章「帝国とジェントルマン」を見よ。
- (5) こうした社会風潮に危惧の念を抱いた支配階級は、奢侈逸楽の風潮を改め、質実剛健の気風を国民全体に拡めようとして「風俗改革協会」を一九九〇年より一七六〇年頃までに設立したのである。(Thomas A. Horne, *The Social Thought of Bernard Mandeville: Virtue and Commerce in Early Eighteenth-Century England*, 1978, chap.1. トーマスA・ホーン『バーナード・マンデヴィルの社会思想―一八世紀初期の英国における徳と商業―』(拙訳)、八千代出版、一九九〇年、第一章。
- (6) 上田辰之助『蜂の寓話』(上田辰之助著作集4)、みすず書房、一九八七年、四六頁。
- (7) 新大陸やアジア・アフリカ地域からロンドンに流入した新奇な商品は、時を同じくして雨後の筍のごとく叢生しはじめたコーヒー・ハウスを舞台として売り捌かれた。コーヒー・ハウスは、また情報交換の場でもあった。コーヒー・ハウスは一杯ペニーのコーヒーを囲んで、あらゆる階層の人々が、あらゆる種類の話題について論じあい、語りあつた自由な情報交換の場であり、暇つぶしの場のことであり、反政府陰謀の震源地であり、商品や株の取引所であり、はたまた新思想の醸成の場でもあった。(川北稔「コーヒー文化の誕生―生活様式の国際化―」角山栄・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』河出書房新社、一九九二年、所収)、九五―六頁。
- (8) パーキンによれば、一八世紀のイギリス社会は「二、三の階級からなる階級社会といったものからは程遠く、数十にもものぼる階層の積み重ねであった」という。(H. J. Perkin, 'The Social Causes of the British Industrial Revolution', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th ser., Vol. 18, 1968, p.129.)
- (9) N. Mckendrick, J. Brewer, and J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England*, 1982, chap.1.
- (10) 鈴木満「一八世紀イギリスにおける国内商業」(小林照夫編『イギリス近代史研究の諸問題―重商主義時代から産業革命

アダム・スミスの商業社会における消費の意義 (山口)

へ』丸善、昭和六〇年、所収）七九頁。

二 衡示的消費の浸透

「一八世紀のイギリスにおいては、独自の消費の爆発をみた。財貨の世界が劇的に拡大し、家具、陶器、銀器、鏡、フォークやナイフ類、庭園用品、ペット、布地を買う新しい機会を含むほどだった^①」といわれるように、一八世紀のイギリス社会には消費社会が到来し、消費の民主化という現象が現れていたのであるが、国内産奢侈品と外国産奢侈品の区別を問わず、奢侈品にたいする需要が強く、新奇な商品の消費習慣は、とりわけ上流貴族や新興のジェントルマン層に著しく、さまざまな奢侈品を所有したり使用したりしながら、新たな生活様式や階級的シンボルを生みだしていった。消費革命は、けっして生活必需品の範囲が拡大したために生じたのではなく、身分や地位を表象するような新奇な諸財貨の登場によって生じたものである。

しかも重要なことは、奢侈品や新奇な商品が競って消費されたとき、そこには、社会的地位や身分をめぐる人々の名誉や面子をかけた競争があったということである。つまり財貨がステイタス・ゲームの印になり、速やかに消費されていった。宮廷や貴族という社会の上流階級において奢侈品や新奇な商品が流行すると、それはヨリ下層の人々に見せびらかされ、新興のジェントルマンを目指す人々、上位の階層を狙う人々が模倣する。上流階級における流行やブームは、あたかも雫が滴るように下位の層に普及していく。

階層的なイギリス社会では、たとえば「衣服のファッションが宮廷にはじまり、下位者の模倣と上位者の差異化と

いう二重のエンジンに容赦なく駆りたてられて、貴族、ジェントルマン層、中流クラス、下層クラスへと移行する。⁽²⁾消費の社会的競争は、ヴェブレンのいう「衡示的（見せびらかしのための）消費」⁽³⁾とジンメルという「トリクル・ダウン（滴下）効果」を両輪として進行していく。⁽⁴⁾これが消費革命を生み出したのである。ジンメルとヴェブレンをフォロワーしながら、マッケンドリックは社会的競争が、この革命の原動力だったと述べている。

「これらの特徴―緊密に階層化されたイギリス社会の性質、垂直の社会移動への努力、社会的対抗心によって培われた対抗支出、社会的競争によって生まれたファッションの強制力―が、広範囲に行きわたった支出能力と結びついて、前例のない消費癖をつくりだしたのである。⁽⁵⁾」

したがって一八世紀におけるイギリス社会の消費革命を生み出したものは、人々の「虚栄心」であり、また「利己心」だということもできる。社会的地位をめぐる競争である。これは生活必需品の争奪戦ではなく、名誉と虚栄をめぐる模倣と競争であった。

ところで、一八世紀の消費社会の現実をいち早く肯定的に捉えたのは、デビット・ヒュームであった。ヒュームは奢侈の消費や贅沢の消費は、まことに結構なことだと積極的に是認する。また、商工業の興隆を奨励する。それは、奢侈の消費によって人々が、いつそう洗練され、知識も旺盛になり、他方、商工業の樹立も同じく、人々を洗練し、マナーを向上させ、社会を文明化するからである。その上、人々の勤勉の精神、市民的徳性をも涵養されるからである。ヒュームの主張に、直接、耳を傾けよう。

「奢侈は、一般に五官の満足における高度の洗練を意味する」⁽⁶⁾とヒュームは述べ、満足を与えるどのような行為も、それだけで悪徳とはならないという。ヒュームにとって、たとえば、家族や友人の面倒をみる場合、「道楽は彼らを犠牲にして求められるような場合にだけ、悪徳」⁽⁷⁾なのであった。社会にあつて奢侈の追求が認められる時代、つまり「洗練された時代は、もつとも幸福であるとともに、もつとも有徳な時代でもある」⁽⁸⁾とヒュームは認識していることが一番重要であろう。生産や交易にとつて最新の改善された方法を見い出そうと、商工業に従事する人々の絶え間のない努力こそは、精神の機能と精神力を拡大する結果をもたらすのである。⁽⁹⁾

「産業活動と機械的技術」が、たえず進歩する社会は「通常、学芸上に何らかの洗練をつくりだす」⁽¹⁰⁾。「時代の精神は、すべての技術に影響をおよぼす。そして人々の精神がひとたび無気力からよびさまされ、振り動かされると、それは四方八方に向かい、あらゆる技術と学問とに改善をもたらす」⁽¹¹⁾とヒュームは確信していた。農業と産業の改善が進むと、人々は多くの同胞と接触する機会をもち、「知識を得たり、交換したりできる都市に密集する」⁽¹²⁾。都市において彼らは、「自分たちの機知や教養を、また会話や暮らしか衣服や家具とかの好みを、見せびらかしたりするのを好む」⁽¹³⁾。技術が進歩するに従つて、人々はいつそう社交的になる。

「彼らは、お互いに交際するという風習自体によつて人間性の高まりを感じ、各人が他人の快楽と愉快とに寄与するに違いない。このようにして、産業活動と知識と人間性とは解きはなしがたい鎖でつながれ合われているのであつて、それらがいつそう磨き上げられた、そして通常いつそう奢侈的な時代と呼ばれている時代に特有なものであることとは、理性によつてだけでなく経験によつても分かるのである」⁽¹⁴⁾。

商工業は人々を洗練し、社交的にし、マナーを向上させ、社会を文明化するというヒュームの説は、スミスによって継承される。スミスはヒュームの説を一步進めて、商工業の進展によって誕生したこの新しい商業社会においては、自由が行きわたり、人々が解放され、その結果、独立が達成されるとみる。スミス自身は『国富論』のなかで、つぎのように述べている。

「従来ほとんどつねに隣人とは戦闘状態にあり、領主にたいしては奴隸的従属状態におかれて暮っていた農村住民の間に、商業と製造業は徐々に秩序と善政をもたらし、それとともに個人の自由と安全をも、もたらした。この点は、ほとんど注意されていないのだが、商工業がもたらした諸結果のなかで、もつとも重要なものである。私の知るかぎりでは、従来この点に着目した著述家はヒューム氏ただ一人である。⁽¹⁵⁾」

また彼は『国富論』において、商工業の発達以前には、ほかに使い途がなかったため、領民の維持に充てられていた大地主や富裕者たちの収入が、商工業の発達にもなつて、彼らの家族や虚栄心を満足させるための子供の玩具まがいの装身具や奢侈品、贅沢品と交換されるようになった結果、封建制が解体するにいたった過程をつぎのように述べる。

「社会の幸福にとって至上の重要性をもつ一変革が、このようにして、社会に貢献するつもりなど少しもたない二つの階層の人々によって引き起こされた。大地主の唯一の動機は、まったく子供じみた虚栄心を満足させることで

あつた。また商人や職人たちは、たわいのなさという点で少しはましだったが、もっぱら自分の利益だけを念頭において、一ペニーでも儲けられるところでは儲けようという、彼ら独自の小商人根性を貫いて行動しただけのことである。だが、両者いずれも、前者の愚かさと後者の勤勉とが徐々にもたらしつつあつたあの大変革について、なんら知りもしなければ、それを予見もしていなかつたのである。⁽¹⁶⁾

スミスは中世の封建制を解体したのは、商工業の発達であり、商工業が発達して社会が文明化し、知識が普及すれば人々が洗練し、マナーも向上することをヒュームにならって洞察していたのである。社会において平和が確立し、商工業が発達すれば、社会は、おのずから民主化・自由化されていくのである。スミスは商工業の発達にともなう生活水準の昇が、個人の独立を保障することを見、封建社会の人間が従属的であるのにたいして、商工業は特定の個人への従属をなくす点を高く評価するのである。

スミスの偉大さは、こうした商工業の力の源泉が、商工業の発達にともなつて勤勉その他の市民的徳性が徐々に涵養され、その結果、生活様式も変わっていく点にあることを早くからはつきりと見抜いていた点にある。⁽¹⁷⁾ 従者や召使いは、貴族の家で怠惰に過ごし、「解雇されたら強盗を働き略奪をする」⁽¹⁸⁾とスミスはいう。「従属ほど人間を腐敗させるものではなく、これに反して、独立は人々の正直をさらに増進する。商工業の樹立は、この独立をもたらすものであつて、犯罪を防止する最善の治政である」⁽¹⁹⁾という『法学講義』ノートにおける、よく知られた「治政論」の思想は、スミスが『国富論』以前からこうした思想をもっていたことを示しているといえる。

これまで見て来たように、ヒュームやスミスが商工業の活動を積極的に奨励したのは、商工業につきものの利己心

が国富を高めるからという理由だけではなく、商工業における経済活動が人々の身だしなみを洗練させ、社交性を高め、「自分の生活状態を改善しようとする自然的努力」²⁰に向かわせ、結果的には、人々の独立を達成するからであった。社会的地位や身分を狙っての消費をめぐる限らない社会的競争は、スミスにあっては、とりもなおさず商工業につきものの私益追求のうちに社会全体の利益を促進していくという彼の、いわゆる「欺瞞」の現れなのである。「自然がこのようにしてわれわれを欺すのは、いいことである。人類の勤勉をかきたて、継続的に運動させておくのは、この欺瞞である」²¹²²。大多数の人々を勤勉たらしめるものは、欺瞞にほかならないというわけだが、スミスはさらに、人々がこのような倒錯に陥るのは、実は人々が虚栄によって動機づけられているからだというのである。スミスにあっては、欺瞞による目的と手段の転倒ゆえの勤勉こそが、人々に「生活のすべての必需品および便益品を供給する」²³のであり、それが「諸国民の富」の源泉なのであった。

このように見てくると、重要なことはスミスにあっては、欺瞞による商工業の発達は、必ずしも「量」の拡大だけでなく、生活の洗練や社交の拡大という「質」の側面において評価されていたことである。ここには、個人の利益追求が、結果として社会全体の富を増進するという欺瞞のもう一つの側面が示されている。それは、奢侈品や新奇な商品の消費を通して、他者によく見られたいという人々の虚栄が、結果として社会の洗練や生活環境の向上をもたらし、ということ、つまり個人の虚栄心が社会の文明の程度を高めるということである。

確かに人は、ただ必要なものを飲食し生命を維持したり、生存のための必需品に取り囲まれて生活しているだけではない。常に社会のなかにあつて、他人の目を気にし、他者の評価を得て尊敬を受け、ヨリ上の地位を獲得し、他人に多少の差をつけたいと思つている。自尊心や嫉妬心が人を突き動かしている。そうだとすると、人間の欲望は、た

だ物質的なものの生理的満足ではなく、ヘーゲルが力説したように、他者からの「承認」を得、さらには「尊敬」を得るといふ「優越願望」を持つところこそある。⁽²⁴⁾ 人間は、ただ生きるだけでなく、社会のなかで絶えず行われる「富と権力と卓越」の追求による社会的評価をめぐって生存競争を繰り広げているといつてよい。したがって、消費も生理的欲求を満足するためにあるのではなく、自己を社会のなかで他者の前にさらし、承認や尊敬を得るためにこそある。つまり、人を消費へと突き動かしているものは人のもつ「虚栄」なのである。

消費をこのように考えたとき、消費はもはや量の問題ではなく質の問題に転化している。もし仮に、消費の量が問題だとしても、それは、その量が生理的な欠乏を充足させるからではなく、虚栄心がわれわれをして、他者よりも多量の奢侈品を持つよう突き動かすからなのである。こうして、スミスやヒュームにとって、消費のすべてではないにせよ、そのかなりの部分は、生存のための生活必需品ではなく、上流階級のシンボルである貴族的な生活を模倣する多少の奢侈品、贅沢品であり、洗練された趣味を表す財貨であり、上流のマナーを示す流行品であった。彼らにとって、虚栄心や優越願望がもたらす奢侈品、新奇な商品の消費や流行を追うことが、それなりに生活の洗練や心地よい社交をもたらすのである。商業社会では、欲望は生理的必要ではなく、社会における「模倣的競争」によって生じるのである。

- (1) Mckendrick, *op.cit.*, p.10.
- (2) G・マクラッケン『文化と消費とシンボルと』(小池和子訳)、勁草書房、一九九〇年、四二頁。
- (3) 吉見俊哉「消費社会論の系譜と現在」(『岩波講座現代社会学』二二卷、岩波書店、一九九六年、所収)を見よ。
- (4) 松原隆一郎『消費資本主義のゆくえ』ちくま新書、二〇〇三年、三四―五頁。

- (5) Mckendrick, *op.cit.*, p.11.
- (9) David Hume, *Political Discourses*, 1752: *The Philosophical Works of David Hume*, edited by T. H. Green and T. H. Grose, 1964, Vol. III, p.299. ヒューム『経済論集』(田中敏弘訳)、東京大学出版会、一九七〇年、二九頁。
- (7) *Ibid.*, p.299. 邦訳、三〇頁。
- (8) *Ibid.*, p.300. 邦訳、三一頁。
- (9) Thomas A. Horne, *op.cit.*, pp.94-5. 邦訳、一二五頁。
- (10) David Hume, *op.cit.*, p.301. 邦訳、三二頁。
- (11) *Ibid.*, p.301. 邦訳、三三頁。
- (12) *Ibid.*, p.302. 邦訳、三三頁。
- (13) *Ibid.*, p.302. 邦訳、三三頁。
- (14) *Ibid.*, p.302. 邦訳、三三―四頁。
- (15) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Glasgow edition, Oxford, 1972, Vol. I, p.412. (以下、WNと略記する) 大河内一男監訳『国富論』Ⅱ、中央公論社、一九七六年、五三頁。(以下、邦訳と略記する。)
- (16) WN, Vol. I, p.422. 邦訳、Ⅱ、六四―五頁。
- (17) 田中正司『アダム・スミスと現代』御茶の水書房、二〇〇〇年、六八頁。
- (18) Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein, Glasgow edition, Oxford, 1978, p.486. 『法学講義』
- (A) Report of 1762-3 (以下、LJ (A) と略記する)
- (B) Report dated 1766 (以下、LJ (B) と略記する) 高島善哉・水田洋訳『アダム・スミス グラスゴウ大学 法学講義』日本評論社、復刻版、一九八九年、三二―四頁。(以下、邦訳と略記する。)

- (19) *LJ* (B), p.315. 邦訳、四八六―七頁。
- (20) *WN*, Vol. I, p.540. 邦訳、Ⅱ、二二六〇頁。
- (21) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Glasgow edition, Oxford, 1976, pp.183-4. (以下、*TMS*と略記する。) 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房、一九八一年、二八〇頁。(以下、邦訳と略記する。)
- (22) この点に関して、水田洋はつぎのような含蓄に富む言葉を述べている。「自然が人間をだまして知っていることを知ってしまった賢人アダム・スミスは、おそらく世間的活動に全力を尽すようなことはしないであろう」と。(水田洋「市民社会の道徳哲学」『季刊社会思想』二巻一号、一五五頁。)
- (23) *WN*, Vol. I, p.10 邦訳、Ⅰ、一頁。
- (24) 佐伯啓思『成長経済の終焉』ダイヤモンド社、二〇〇三年、二六六頁。

三 富と上流人士への称賛

貨幣、奢侈品、新奇な商品、目新しい情報、こうしたモノが次々に生みだされ、虚栄心に煽られた人々がその後を追いかけていたのが、この時代の姿であった。^①この場合、虚栄とは目に見える形で、これらのモノの周囲に顕示されていたといつてよい。すなわち貨幣を保有すること、奢侈品を見せびらかすこと、目新しい情報やゴシップを入手すること、それが、この場合の虚栄である。人柄や家柄にたいする「尊敬」ではなく、「立派に見えること」にたいする虚栄が、ぬくぬくと育つていった。虚栄は外面的な豪華さ、華やかさへと向かい、これは模倣可能であった。ここに流行が生じ、流行に乗り続けることが虚栄の一部になっていく。

ところでスミスは、『道德感情論』のなかで虚栄あるいは名誉や評判について、興味深い見解を披露する。

「人類が、われわれの悲哀にたいしてよりも歡喜にたいして、全面的に同感する傾向をもっているために、われわれは自分の富裕を見せびらかし、貧乏を隠すのである。……主として人類の諸感情にたいするこの顧慮から、われわれは富裕を求め貧乏を避けるのである。⁽²⁾」

「何にも比べられぬほどにくやしいのは、われわれの困苦を公共の面前にさらさざるを得ないことである。⁽³⁾」

こうして社会の公衆から觀察されること、明確な是認によつて注目されることは、とりわけ特定の人士を公衆の面前へと押しだす。それは、いうまでもなく富裕な上流人士である。彼らは常に社会で公共的注目の的となる。そして「富裕な人々および勢力ある人々のすべての情念についていくという、人類のこの性向のうえに、諸身分の区別と社会の秩序とが築かれるのである。⁽⁴⁾」この上流人士への大衆のへつらいは、「彼らの境遇の有利さへの一般人の感嘆から生ずる。⁽⁵⁾」「自然はわれわれに、彼ら〔上流人士―引用者〕にたいして従順であるように、彼らの高い地位の前に、震えひれ伏すように、……教えるのである⁽⁶⁾」とまでスミスはいう。だが、スミスは『道德感情論』第六版のなかで、道德感情の腐敗を論じた章を追加して、つぎのようについて。

「富裕な人々、有力な人々に感嘆し、ほとんど崇拜し、そして貧乏で卑しい状態にある人々を、軽蔑し、少なくとも無視するという、この性向は、諸身分と社会の秩序を確立するのにも維持するのにも、ともに必要であるとはいえ、

同時にわれわれの諸道徳感情の腐敗の、大きな、そしてもつとも普遍的な原因である。⁽⁷⁾」

そして「人類の尊敬と感嘆」を獲得し、享受する道は、二つあるという。一つは「知恵の研究と徳性の実行」という道であり、二番目は「富と上流の地位の獲得」という道である。⁽⁸⁾ 確かに「人類のうちの大群衆は、富と上流の地位の、感嘆者であり崇拜者⁽⁹⁾」である。しかし「知恵と徳性」は、「富と上流」とは違っているのだ。実際、「知恵と徳性」は、必ずしも「富と上流」に宿るとはかぎらない。むしろ逆であろう。そして本当に尊敬に値するのは、「知恵と徳性」のほうであろう。「富裕な人と上流の人」のもつ「高慢と虚栄」よりも尊敬に値する徳をそなえた人の「真実で確固とした値うち」のほうだが、本当は「はるかに多く感嘆されるべきものなのである。⁽¹⁰⁾」「値うちと徳性から切り離された、たんなる富と上流の地位とが、われわれの尊敬に値するということは、善良な道徳にとって、……快適なことではない。⁽¹¹⁾」

ところが、「世間」は、「注意が不十分な観察者」から成り立っており、しばしば誤った判断を下す。世間では「知恵と徳性の人士」ではなく、「富と上流の人士」が称賛される。そして、この世間に調子を合わせる人間の大部分は、富裕な人士や上流人士を模倣し、流行を追うことになる。これこそは「虚栄」の人なのである。

「虚栄的な人々は、しばしば、みずから流行にあつた不品行の様子をする。それを彼らは、心のなかでは是認してはいない。だが彼らは、彼ら自身としては称賛に値すると考えていない物事について、称賛されたいと希望するのである。⁽¹²⁾」

スミスにあつては、社会のなかで人々が虚栄にとらわれ、高価な奢侈品の消費や流行を追い、富と地位の獲得という社会的評価をめぐつて競争しているのが、この社会の現実の姿なのである。消費も自己を社会のなかで他者の前にさらし、承認や尊敬を得る「優越願望」のためにこそある。

- (1) 上田辰之助、前掲書、六七―八四頁、川北稔、前掲論文、九四―一二七頁、佐伯啓思『アダム・スミスの誤算』(上)、PHP新書、一九九九年、八九―九〇頁を見よ。
- (2) *TMS.*, p.50. 邦訳、七二頁。
- (3) *TMS.*, p.50. 邦訳、七二頁。
- (4) *TMS.*, p.52. 邦訳、七六頁。
- (5) *TMS.*, p.52. 邦訳、七六頁。
- (6) *TMS.*, p.53. 邦訳、七六頁。
- (7) *TMS.*, p.61. 邦訳、九五頁。
- (8) *TMS.*, p.62. 邦訳、九五頁。
- (9) *TMS.*, p.62. 邦訳、九六頁。
- (10) *TMS.*, p.62. 邦訳、九六頁。
- (11) *TMS.*, p.62. 邦訳、九六頁。
- (12) *TMS.*, p.64. 邦訳、九八頁。

四 富と徳性の問題

虚栄にとらわれた人をスミス自身は、けっして幸福な人とは見なしていない。逆に、「真実の平静」と「ささやかな安全と満足」を犠牲にした憐れな人と見ている。スミスはつぎのようにいう。

「彼の全生涯にわたって、彼は自分がけっして到達しないかもしれない、ある人為的で優雅な憩いの観念を追求し、そのために彼は、いつでも彼の力のおよぶ範囲にある真実の平静を犠牲にするのであって、そしてその観念は、もし彼が老齡の極においてついにそれに到達するとしても、彼がその代りに放棄したあのささやかな安全と満足とに、いかなる点でもまさっていないことを知るであろう。⁽¹⁾」

そしてスミスの以下の言葉は、賢人としての側面を如実に示している。

人間生活の真実の幸福をなす「肉体の安楽と精神の平和において、生活上のさまざまな身分は、すべては同じ水準にあり、そして公道の傍で日なたぼっこをしている乞食は、国王たちがそれを得るために戦っている安全性を所有しているのである。⁽²⁾」

ここから見てとれることは、スミスによれば、人間が本来求めているものは「真実の幸福」であり、それは「真実

の平静」と「ささやかな安全と満足」であり、あるいは「肉体の安楽と精神の平和」なのである。

ところが、社会のなかでは人々は、そういうものは、高い「地位と富」とによつてもたらされると錯覚する。別のいい方をするなら、上流人士こそ、そういう「安全で幸福」な状態にあると「誤つて」想像するのである。つまり人々を勤勉へ向けて駆りたてるのは、そういう「誤つて」想像された「抽象的観念」⁽³⁾にしかすぎない。人々は結局、「肉体の安楽と精神の平和」ではなくて、むしろ「肉体の疲労と精神の不安」を甘受することになる。これは、まさに目的と手段とを取り違えた欺瞞の姿なのである。スミスにあつては、前に見たように、この欺瞞による勤勉こそが、国富の源泉なのであり、人々に「生活必需品および便宜品を供給する」のであつた。

スミスの体系では、これまで見て来たように、「観察されること、明確な是認をもつて注目されること」、これこそが人間の生き甲斐を支えるものであり、社会のなかで人々をさまざまな行為におもむかせる根本動機なのである。さらに、「富と地位」が人々を惹きつけるという場合にも、そうなるのは結局は、「富や地位」が、それぞれ直接的な何らかの便宜をもたらすからではなく、むしろそれらが人々の「注意を惹きつける」からなのである。はつきり言えば、「安楽または快樂ではなくて、虚栄がわれわれの関心を惹くのである。」⁽⁴⁾

したがって、本来人間にとつて真実の幸福という視点からみれば、本当は膨大な生活物資Ⅱ財貨を必要とするわけではない。真の幸福は、ささやかな量の生活物資があれば十分に達成されるのである。社会の大多数の人々は、幸福を享受しうる境遇にある。だから、スミスはつぎのように述べる。

「健康で、負債がなく、良心にやましいところのない人の幸福にたいして、何をつけ加えることができようか。こ

の境遇にある人にたいしては、財産のすべての追加は余計なものだ、というべきであろう。……この境遇は、人類の自然で通常の状態とよばれるが、きわめて当っているであろう^⑤と。

この状態は、人類の自然で通常の状態であるから、「もつともつまらぬ労働者の賃金でさえ、それ〔自然の諸必要―引用者〕を満たすことができる。その賃金が彼に、食料と衣服と、住宅および家族という快適さとを提供するのを、われわれは見ている。もし、われわれが厳密に、彼の家計を調べるならば、彼が賃金のうちの大きな部分を、余計なもの^⑥と見なされうる諸便宜などに、使っていることが分かるであろう」と。

要するに、人間にとっての真の幸福は、ささやかな量の生活物資があれば十分に達成されるのであり、この状態は社会の大半の人々の境遇でもあるから、大多数の人々は、幸福を享受できる。この境遇のもとで、彼らは健康で負債がなく、良心にやましいところのない、幸福な生活をおくることができる。この境遇にたいする富の増加は、余計なものである。こう、スミスは主張するのだ。したがってスミスにとって、社会の大多数の人々^⑦中下層の人々は、それぞれ幸福を達成しうる立場にある。それは、つぎのよく知られた言葉に表われている。

「中流ならびに下流の、生活上の地位においては、徳性への道と、財産への道、少なくともそういう地位にある人が、獲得することを期待しても妥当であるような財産の道は、幸福なことに、大抵の場合、ほとんど同一である。すべての中流および下流の職業においては、真実で堅固な職業的能力が、慎慮、正義、不動、節制の行動と結合すれば、

成功しそこなうことは、めったにありえない。」⁽⁷⁾

「中流ならびに下流の階級」 中下層の生活状態にある人々についていえば、彼らの大多数にあつては「徳性への道」と「財産への道」とは、大抵の場合、ほとんど一致している。慎慮、正義、節制などの諸徳性に基づいて、彼らが有しているその職業的諸能力を、たゆまず鍛え、發揮していくことこそが、彼らにあつては成功へのもつとも確實な道である。こう、スミスはいうのである。

しかし、たとえそうだとしても、彼らの勤勉の目的それ自身が欺瞞であり、従つて勤勞の動機も、眞の徳性ではなく虚栄にあるとするなら、それは眞の人間の道徳性とは呼べないものになってしまうのではないか。やはり、ここには矛盾する人間像がそのまま描写されつばなしになっているのではないか。スミスにおけるこの二つの人間像の矛盾、これをスミス自身がうまく解決したということではなく、いずれの人間像もスミスの思いのなかでは、それなりに意味あるものとして共存していたに違いないことなのである。そして、その共存した人間こそが、ある種の矛盾を孕んでいるように見えようと、あるいは矛盾を孕んでいるがゆえに、スミスの目に映つた豊かな現実そのものではなかつたらうか。

スミスは人間の道徳性を備えつつも、一方において、虚栄に強く動かされざるを得ない人間の弱さや愚かさをも備えている、ごく普通の平凡な人間をありのままに肯定しようとする。こういう人間で社会は成り立っているのだ。そして欺瞞のなかでの虚栄を逆手にとつて、虚栄こそが社会の富裕と文明化を達成すると考える。このことは、スミスの社会像にも反映しているように思われる。それは、以下の小林昇の文章が参考にならう。「スミスのモラル・

フィロソフィーにあつては、人間の社会は近代的な階級社会としてではなく、健康で活力のある市民的勤労大衆がその上に彼らの社会的・経済的努力の目標である富貴な人々を載せている社会^⑧として把握されている。つまり上流階級の存在によつて、欺瞞のなかで現在よりも上位の階級に仲間入りをしたいという虚栄が、中下層の人々の心を突き動かし、この虚栄が彼らの勤勉を促し、経済活動の動機となり、それによつて社会の富裕が可能になるのである。

そして、社会にあつて欺瞞のなかで人々が虚栄にとらわれ、奢侈の消費や流行を追つて、他者に優越しようと競争している姿、これがスミスの目に映つた豊かな現実そのものであつたらう。人々の勤勉の目的それ自身が欺瞞であり、従つて勤労の動機も徳性ではなく虚栄であつても、この虚栄こそが、生産力の上昇と社会の富裕を生みだすとともに、結果として社会の洗練や生活水準の向上をもたらすこと、つまり社会の文明の程度を高めること、このことをスミスは洞察していたのである。したがつて、ハーシユマンのつぎの指摘は核心をついているだらう。スミスは「経済行為の非経済的源泉」について、すなわち「野心、権力欲、および尊敬されたいという欲求」こそが、経済行為の動機となり、勤労意欲を刺激することを見透かしていたのである^⑨。

- (1) *TMS*, p.181. 邦訳、二七七頁。
- (2) *TMS*, p.185. 邦訳、二八一頁。
- (3) *TMS*, pp.51-2. 邦訳、七五頁。
- (4) *TMS*, p.50. 邦訳、七三頁。
- (5) *TMS*, p.45. 邦訳、六五頁。
- (6) *TMS*, p.50. 邦訳、七二頁。

(7) TMS, p.63. 邦訳、九六一―七頁。

(8) 小林昇『『国富論』における人間像について』（『季刊社会思想』第三卷第一号、所収）、五五頁。

(9) Albert O. Hirschman, *The Passions and the Interests — Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*—, 1977, p.110. 佐々木毅・巨祐介共訳『情念の政治経済学』法政大学出版社、一九八五年、一一〇頁。

五 むすびにかえて

スミスの思想が誕生した一八世紀という時代において、中産階級つまり中下層の人々の生活態度を振り返ってみると、当時、彼らなりに一人の独立した人間として生きていこうとした姿が浮び上がる。ここにいう一人の独立した人間とは、いうまでもなく利己心をもった経済人であるが、その意味はすでに述べたように、自己の生活改善努力をする人のことであるが、これは当時の新興の商業社会ではまだ新しい人間の考え方であって、こういう本能はそれまでの封建社会では、人間活動のなかでも、もつとも価値の低い、下賤なものと思われていた。

利己心という言葉もタブーであった。利己心が作りだすと考えられる徳性は、「慎慮、用心、細心、節約、恒常性、不動性」^①などであるが、これらの徳性は旧特権階級の社会では軽蔑すべき人間行動であった。それが今や中下層の人々の手によって、こうした徳性に基づく人間行為つまり利己心を起動力にして、「富裕への道」が「徳性への道」に通ずる人間努力が、積極的に商業社会における新しい徳性としての地位を与えられるに至った。

この時代はスミスが指摘したように、ある種の欺瞞を不可避的な毒素として含みながらも、経済人という新しい人間が活躍しようとした、進歩が未だ希望であった一つの若々しい時代だったといえるであろう。^②この時代になつては

じめて人々が動機はともあれ、労働自体のなかに、あるいは自己の生活改善のなかに、大きな生き甲斐を見いだしたことが、重要であろう。そしてスミスにとって、そういう人々の姿は、他者の「注目」を得たり、他者の「承認」や「尊敬」を得たり、あるいは社会的地位や上流の身分を得たいがための欺瞞という毒素を含む勤勉であっても、人間として自然の姿であつたらう。

実際、自分の性に合った職業を選択する機会が与えられるとともに、どんな人間でも労働の成果が自己のものになるという経験は、当時の人々にとって新鮮かつ感動的なことであつたはずである。そういう事態が大衆的規模で実現したのが、まさに一八世紀のイギリス社会であつた。それはイギリスにおいてこそ、名譽革命によつて、理論的にはジョン・ロックによつて、根柢を与えられた自分の労働の成果が自己のものになるという市民社会を確立していたからである。

封建社会のもとで長期に亘つて搾取され続けてきた人々が、この市民社会の実現によつて、労働すること以一応賃金を得られることを知った時、ある人々は勤労で僅かばかりの金銭が得られるとそれを遊興に使つて喜びを見だし、⁽³⁾ある人々は自分の生活が改善されることのなかに喜びを見いだしたとしても不思議ではない。それゆえ、ウィリアム・ホガースの有名な「勤勉と怠惰」と名づけられた銅版画が、一種の教訓的絵画として流布したと考えられるわけである。⁽⁴⁾

しかしたとえ、ホガースの銅版画「ジン横丁」⁽⁵⁾のような事態が一方であつたとしても、当時のイギリス社会の全体がある種の経済的活況を呈して、消費社会が到来し、消費革命と呼ばれる現象が起つていたことが重要なのである。⁽⁶⁾問題は、そういう客観情勢に支えられたイギリス社会全体の活気であり、そして、この活気それ自身を生んでいった

人々の生活改善への「期待」なのである。人間は将来にたいする期待があつて、はじめて生きていくことができる。将来にたいして、何らかの意味で期待がもてるか否かに係っている。期待がもてなければ、将来の社会への不信感が高まり、不透明感が蔓延し、消費を手控えることになろう。

一八世紀のイギリス社会は、社会全体がある種の期待に包まれた前途洋々たる時代であつた。それはもちろん革命への期待ではなく、もつと地道な、将来自分自身の生活が向上するかもしれないという期待である。それは、真面目に努力すれば、自分の生活が改善されるかもしれないという見込みであるとともに、一山当てれば大金を得られるかもしれないという期待でもあつた。南海泡沫事件は、そういう期待が膨れ上がつて、まさに泡と消えた象徴的な事件であつた。そしてこの辺の事情は、まさにスミスの経済的動機としての「虚栄」と「野心」の議論に如実に反映されているといつてよい。

しかし社会の中下層の人々、つまり大多数の人々は、もつと地道な道を選び、そして手ごたえを感じていたのである。それがまた着実に期待と活気をも生み出したのである。いずれにしても、この一八世紀の時代の動きは、人間としてあり得べき自然の姿としてスミスの目に映つたのであろう。あの活気のなかに見られる怠惰や勤勉^①は、それぞれに人間としてあり得べき自然の姿だったのである。とりわけ、中下層に属する大多数の人々のあの勤勉は、たとえ欺瞞による目的と手段の転倒ゆえの勤勉だつたとしても、直接の動機である生活改善への意欲、あるいは利己心は、まことに人間としてもつともな心性であつた。

しかも、この利己心は、実際、他者の評判を得るために発動され、触発されたものであれば、この欲望の実現は、単なる勤勉のみならず、正義、慎慮という徳性を伴わずしてあり得ない。そうだとすれば、この新しい商業社会は、

こういった勤勉意欲をもたない家の奉公人を寄食させていた封建制に比ぶべくもない社会と考えられたのである。とりわけ、あの勤勉の背後に「富と地位」を得ようとする利己的動機を読みとり、さらにその背後に、人々の注目や是認を得たいという人間の根源的な願望を読みとったスマスは、おそらく、そういう人々を単に「欺瞞」として一挙に断罪してしまう事はできなかったのである。

一八世紀の消費社会の到来という現実を前にして、スマスにあつては、欺瞞のなかで虚栄が人々の心を突き動かす、別のいい方をすれば、奢侈の消費によって富貴な人士を模倣し、流行を追いたいという虚栄が彼らの勤勉を促し、経済活動の重要な動機となり、それによって商工業が発達し、社会の富裕が実現すると見たのである。と同時に、この結果として、社会の洗練と人々の社交性の向上、つまり社会の文明の程度を高めていくことになるのである。

- (1) *TMS*, p.304. 邦訳、三七九頁。
- (2) 井上和雄『資本主義と人間らしさ—アダム・スミスの場合—』日本経済評論社、一九八八年、三〇〇頁。
- (3) 当時の遊興については、ミッチェル&リーズ『ロンドン庶民生活史』(松村尠訳)、みすず書房、一九八二年、第六章第三節、第一章第二節など見よ。
- (4) ホガースの銅版画については、たとえば、つぎの文献が有益である。*Manners and Morals — Hogarth and British Painting 1700-1760*, The Tate Gallery, ed., 1987.
- (5) 「シン横丁」については、たとえば、つぎの文献を見よ。E. Royston Pike, *Human Documents of Adam Smith's Time*, 1974, pp.63-4.
- (6) 上田辰之助、前掲書、第一部第二章第二節を見よ。
- (7) 「勤勉」と「怠惰」との対比が、一八世紀において、激しい論議の中心になった話題であり、それは、怠惰な人間をどう

やって勤勉な人間に仕立て上げるかであった。そして怠惰と浪費、これが一八世紀を通じてのイギリス最大の問題であり、これにどう対処したらいいかが、実は「諸国民の富」の問題の裏側なのであり、ポリティカル・エコノミーの隠された課題だった。（大河内一男『アダム・スミス』講談社、昭和五四年、一五八―一九頁。）

消費によって富貴な者を模倣し、流行を追いたいという虚栄が、人々の勤勉を促し、経済活動の動機になり、さらに、工業の発達が社会を文明化することは事実である。だが経済が発展すれば生活が豊かになるけれども、人々は金儲けに夢中になり、人間を大切にする気持ちが失われていく。つまり、人々が陥る道徳的腐敗の問題をスミスが懸念したことは忘れてはならない。

